

幼少期から悩まされる幻聴や幻覚を作品に昇華し、世界的に評価される前衛芸術家、草間弥生さん。5月22日まで東京・六本木の国立新美術館で開かれている、過去最大規模の個展「わが永遠の魂」では、87歳にして芸術との格闘にますます熱量を上げる作家の魂を見て取ることができぬ。

(文化部 森田睦)

国立新美術館

# 草間弥生さん 最大規模の個展

## 永遠の荒行 エネルギー 充滿

2009年に始めた大画面の絵画シリーズ「わが永遠の魂」を中心に、1930年代の作品から新作まで約250点を並べる。会場に入るといきなりハイライト。縦約50尺、横約16尺の巨大な展示室の壁に

は、1尺62あるいは1尺94四方の正方形のキャンパスにアクリル絵の具で描いた、「わが永遠の魂」シリーズ計132枚が隙間なく並ぶ。

メインの展示室をぐるりと囲むように配置された複

数の小さな展示室は、主に20世紀の作品を並べる回廊パート。長野県松本市で過ごした少女期の絵画や米ニューヨーク時代(57〜79年)の作品も見られる。無数の網目や水玉の絵画、男根状の突起物で家具を覆ったソ

フト・スカルプチュア(柔らかな彫刻)、反戦や性の解放などのメッセージを託したパフォーマンスなど、多彩な表現の足跡をたどれる。

回顧パートを巡った後、大展示室に戻ると、気づくのは最新シリーズ「わが永遠の魂」の色数の多さだ。

かぼちゃ、水玉といった代表作は、色鮮やかな色のイメージだが、実は赤と白、黄と黒など2色または3色



草間弥生さん

く刻み込み。



展示室の壁にぎっしりと並べられた「わが永遠の魂」シリーズの絵画

世界を魅了し続ける草間さんだが、特に近年の世界的な盛り上がりは目を見張るものがある。

2013年以降の大型巡回展だけでも、中南米4か国(13〜15年)、東アジア3か国・地域(同)、北欧4か国(15〜17年)の三つが挙がる。特に中南米展には延べ245万人が訪れ、14年の世界で最も来場者が多い展覧会になった。国立新美術館の個展開幕の翌日の2月23日から、アメリカでも回顧展が開幕。18年まで北米計5か所を巡回する。絶えず世界のどこかで展覧会が開かれている状況なのだ。

人気は競売にも表れている。クリスティーズが14年11月にニューヨークで行った競売で、白で無限の網を

### 愛、宇宙……世界に愛されるテーマ

中南米展に245万人、競売で8億円超

表現した絵画「White No.28」(1960年)が、当時のレートで8億1700万円で落札され、草間作品の最高落札額を大幅に更新した。16年には米タイム誌の「世界で最も影響力のある100人」に日本人で唯一選ばれた。

国や人種を問わず作品が愛される理由について、国立新美術館の南雄介副館長は「愛や平和、死、宇宙という、文化や宗教を超えた普遍的なテーマを扱っているからだ」と解説する。近年の盛り上がりについては「色鮮やかな作品の背後には、草間さんの葛藤や死への意識がある。それが、複雑化する社会の中で緊張を強いられて生きる現代人の波長と合っているのだ」と分析している。

草間作品のファンだという青柳正規・東大名誉教授とタレントのローラさんに、お気に入りの作品を挙げて、その魅力についてコメントしてもらった。

### ■ ファンに魅力を聞く



「黄樹」1992年 フォーエバー現代美術館蔵 ©YAYOI KUSAMA

#### 青柳正規さん



絡み合う気根は互いにもつれ合い、支え合い、そして締め付け合う。生命の横溢とそのさきの不安。原始のホロ・ヴァークニ(空間の恐怖)から帰還した世界の不条理さとの遭遇が、ふたたび遙か遠くの太古へと誘う。草間の世界は理性には倫理を、倫理に性的衝動を、食欲には純な欲求を対比させ、往還させ、私たちのしっかりとしていたはずの立ち位置を根底から揺さぶる。その揺さぶりにいつの間にか陶酔してしまう。

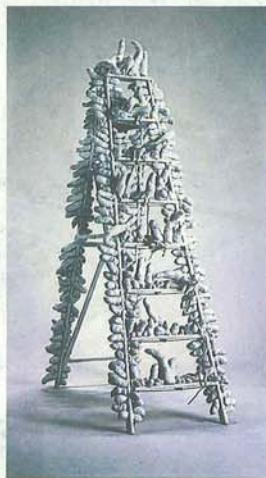
#### ローラさん



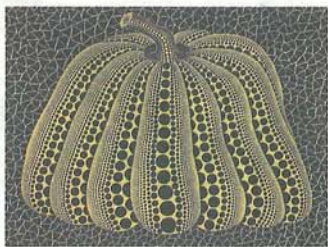
昨年、ロンドンのピクトリア・ミロ・ギャラリーで開かれた個展を、朝から並んで見に行きました。「シャンデリア」というのは古くからある馴染みの存在ですが、そこに「傷みの」という一言がついていることに惹かれました。その一言があるだけで、シャンデリアを見た時に、悲しいせつない気分させてくれます。これからも草間さんの作っていく世界がとても楽しみです!



「傷みのシャンデリア」Chandelier of Grief, no.003 copyright of Yayoi Kusama courtesy of Ota Fine Arts, Tokyo/Singapore



「トラウヴェンク・ラウト」1964年 京都国立近代美術館蔵 撮影・土野則宏 ©YAYOI KUSAMA



「かぼちゃ」1999年 松本市美術館蔵 ©YAYOI KUSAMA

限られた色数で構成されることが多い。一方、「わが永遠の魂」シリーズには色数を増やしたものが多く、その強い色調で描かれた色の組み合わせが、視覚を刺激する。網目、水玉、目、突起など回顧パートで見られるモチーフもしばしば登場する。

すでに500点を超えるこの連作は、草間さんがこれまで培ってきた経験や技術、才能を存分に動員して制作されている。総力戦の芸術と言ってもいい。

草間さんは、2月21日の開幕式で「前衛芸術家として宇宙の果てまでも開いた」とあいさつした。その言葉どおり、入院先の病院からアトリエに通い、1日約9時間も描き続けているという。終わりのない荒行に挑んでいるかのようだ。

それ故、ぎっしりと並んだ作品群が放つエネルギーは、巨大な展示室に充滿し、見る者を圧倒して記憶に深く刻み込み。

立ち位置根底から揺さぶる「黄樹」

悲しく切ない「傷みのシャンデリア」

文化

アート&エンタ